



① 観光・レクリエーション施設や商業施設などが建ち並び現在の与次郎ヶ浜

与次郎ヶ浜埋め立て

〜水搬送工法〜

城山のシラスを錦江湾へ
画期的な工法で
観光・レクリエーションの
拠点を造成

錦江湾と桜島をのぞむ抜群のロケーションに県立鴨池公園(陸上競技場・野球場・庭球場・補助競技場)や鹿児島市民文化ホールなどが置かれ、鹿児島県の観光・レクリエーションの拠点となっている与次郎ヶ浜地区。

与次郎ヶ浜は、その名が示すとおり、もともとは砂浜でした。陸地だったのは鹿児島県下荒田の鹿児島大学水産学部あたりまでで、国道225号からすぐ近くに砂浜が広がっていました。今も、甲突川河口にある天保山公園には松林が残っており、当時の浜辺の面影を偲ばせます。

この地が埋立地として整備されたのは昭和42年(昭和47年)のこと。総事業費約97億円、埋立面積は109万平方メートルの大規模な事業でした。

ではこの広大な土地は、どのようにして埋め立てられたのでしょうか。

埋め立てに要する土砂の大部分は、城山団地造成で山を削って出たシラスが利用されました。その運搬方法は、当時、全国でも実用例のなかった「水搬送工法」という新工法を採用。鹿児島港内の滑川口(なまわく)(現在の鹿

広告



(写真提供：南日本新聞社)



4



2



5



3

- ②水搬送工法による埋め立て（昭和42年頃） ③昭和47年頃の与次郎ヶ浜 ④昭和47年頃の県立鴨池公園
 ⑤太陽国体開会式（鴨池陸上競技場：昭和47年10月22日） ⑥長水路に建てられた水中展望塔「マリパーク」（昭和48年頃）

児島港本港区桜島フェリーターミナル付近で汲み上げた海水を長さ約2.4キロメートルの圧送管で冷水町側から城山に送り込みプラントでシラスと混合。国道3号側に送り出された土砂を甲突川沿い約6キロメートルを下る送泥管により与次郎ヶ浜へと一気に送り込むという非常に大掛かりなものでした。水搬送工法はダンプトラック利用との比較で約46%の経費ですみ、高速運搬も可能。その大きな成果が注目され、全国から多くの視察団も訪れました。

また、三重構造の護岸も特徴的で外部と内部の護岸堤防に挟まれて長さ1573メートルの長水路が延びています。これは景観を重視し、堤防の高さを抑えるための工夫です。当時、長水路には、海中で泳ぐ魚を見ることが出来る展望施設「マリパーク」も併設され、鹿児島市の新名所として多くの人が訪れ、球体に乗せたタワーは与次郎ヶ浜のシンボルとなりました。

このようにして新たに誕生した与次郎ヶ浜地区は、昭和47年に県立鴨池公園を中心に開催された第27回国民体育大会「太陽国体」を契機に、ホテル、ボウリング場、遊園地などの施設が次々と建設され、観光・レクリエーションの拠点として確立していきました。

現在、与次郎ヶ浜地区は、大型の商業施設や新聞社、放送局が立地するなど、業務施設が増加しています。

天保末（1840年頃）に平田与次郎が埋築した与次郎ヶ浜は、時代とともに姿を変え、これまでの観光・レクリエーションの拠点と併せて業務地区としても新たな発展が期待されています。

参考資料：「鹿児島開発事業団史 二十八年のあゆみ」

広告